

同窓会だより

第46回全国歯科大学同窓・校友会懇話会に出席して

同窓会会長 神田 正一

日 時：平成13年11月10日（土）

午後2時～4時50分

場 所：ホテル日航福岡

当番校：福岡歯科大学

第46回全国歯科大学同窓・校友会懇話会が、福岡歯科大学同窓会の主催により、福岡市において開催されました。空路にて福岡市に入り、野村副会長と共に会に臨みました。開会の辞、当番校会長の挨拶、来賓挨拶と続き、早速会議に入り「医の心」という演題にて特別講演が行われました。福岡歯科学園理事長、田中健蔵先生の講演は21世紀の医療の課題という観点から、医療全般および歯学教育などについての中広い内容のものでした。最後に、歯科開業医の厳しい現実を映し出したあるテレビ放送番組のビデオが紹介され、出席者一同ため息を吐きながら見て居りました。

以下講演要旨。

1. 21世紀の医療の課題
2. 医歯学の進歩、あれこれ
3. 歯科医師の活躍する分野の拡大
4. 歯学教育の課題
5. 私のみた歯科医師像の変遷
6. 社会は歯科医療をどうみているか
7. 歯科衛生学の確立

そして、1時間半あまりの講演を、諸葛孔明の家訓「優れた人は静かに身を修め、徳を養う。無欲でなければ志は立たずおだやかでなければ道は遠い。学問は静から、才能は学から生まれる。学ぶことで才能は開花する。志がなければ学問の完成はない。」という言葉で締めくくられました。

その後協議にうつり、次期当番校は日本大学松戸歯学部で、来年6月15日（土）に開催されることとなり、又次次期は、松本歯科大学ということが決定されました。

その後、懇親会となりましたが、その席でこの全歯懇もそろそろ年に1回にした方がという話も出て、次回の協議題に登ってくる可能性が出てきたようです。

全国歯科大学同窓・校友会懇話会次第

1. 開会の辞
福岡歯科大学同窓会副会長 吉田 公典
2. 当番校会長挨拶
福岡歯科大学同窓会会長 宮口 巖
3. 来賓挨拶
日本歯科医師会会長 臼田 貞夫（代理）
福岡県歯科医師会会長 河野 博之（代理）
衆議院議員 吉田 幸弘
4. 来賓紹介
5. 出席者紹介
6. 全歯懇会議 特別講演 「医の心」
講師 福岡歯科学園理事長 田中 健蔵
座長 福岡歯科大学同窓会副会長 武井 俊哉
7. 協議
議長選出
(1)次次期当番校選出
(2)その他
8. 次期当番校挨拶
日本大学松戸歯学部同窓会
9. 閉会の辞
福岡歯科大学同窓会副会長 千原 眞治

平成13年度秋の新設国立大学歯学部連絡協議会（国歯協）報告

同窓会副会長 野村 修一

日時：平成13年11月11日（日）9：00～12：00

会場：チサンホテル博多

当番校：九州大学歯学部同窓会

会次第

1. 開会の辞

九州大学歯学部同窓会副会長 高嶋 昭博

2. 当番校挨拶

九州大学歯学部同窓会会長 西原 迪彦

3. 出席者自己紹介

4. 発表ならびに協議

「会費納入状況と未納者対策について」

「学生会員について」

九州大学歯学部同窓会専務理事 石井 潔

5. 協議

① 卒後臨床研修に関する同窓会の関与について

② 東京医科歯科大学の入会希望について

③ 次々回の当番校について

次回 徳島大学

次々回 大阪大学

6. 閉会の辞

九州大学歯学部同窓会副会長 松本 敏秀

第46回全歯懇の翌日に九州大学歯学部同窓会主催による秋の国歯協が行われた。

前日のセレモニー的な会とは異なり、各同窓会が抱える課題について率直な意見の交換が行われた。

1. 「会費納入状況と未納者対策、学生会員など」について

各大学同窓会へのアンケート調査結果がスライドを交えて報告された。

会費の納入率は各大学とも50～70%程度で、それほど差はなかった。東北大、岡山大では終身会員制を導入していた。

納入率の高い大学では徴収方法に工夫がみられること、納入率向上には自動引き落としの効果が大きいこと、会費未納者への納入依頼法を工夫していることなど、本会でも参考となる結果が報告された。

また、会費の長期末納者に対するペナルティは概ね同じ内容であった。

学生会員制度を設けている大学は半数程度であった。また、他大学出身の大学院生に対して非会員としているのは7大学、3大学では正会員あるいは希望者を準会員としていた。

同窓会と学生との交流・援助は、各大学とも様々な形で行っていた。発行物配布(2大学)、早期臨床体験学習への協力、学術講演会などへの無料参加などを行っている大学もあった。大学との関わりでは少し差異があり、大学側との協議・懇親会を行っているのは6大学であった。

以上、各同窓会とも会費の納入、特に若い層の同窓会離れに苦慮している様子が明らかとなった。

2. 協議

1) 「卒後臨床研修に関する同窓会の関与について」

平成13年4月現在、2大学(東京医科歯科大、長崎大)以外の国立大歯学部附属病院では複合研修方式の従たる施設がない状況である。

また、義務化された時の財政面が不明なこともあって、今回は複合研修方式による卒後臨床研修制度に関する情報を交換し、次回への継続審議事項とした。

2) 「東京医科歯科大学の入会希望について」

東京医科歯科大学の国歯協への参加について詳しい大阪大学歯学部同窓会会長が欠席のため、次回に再度話し合うこととした。

今後の国歯協のあり方として、行政あるいは日本歯科医師会に対して要望、意見を出すのであれば、全ての国立大学歯学部同窓会の統一したものが必要であるとの発言があった。

3) 「次々回の当番校について」

平成14年秋の全歯懇の当番は松本歯科大同窓

会であり、本来は新潟大であるが、平成15年秋の全歯懇当番校であるため、次に近距離である大阪大学に担当してもらうこととなった。

2001年度第1回歯学部教授会・同窓会定期協議会報告

渉外理事 藤 巻 哲 (15期)

日 時：2001年8月8日(水) 午後7:00から

場 所：割烹「しまや」

出席者：(教授会) 河野病院長、山田教授、野村教授

(同窓会) 神田会長、赤坂副会長、多和田副会長、深町専務理事、藤巻渉外理事

花田学部長は所要のため欠席との説明が、河野病院長よりなされた。

最初に神田会長より2月に歯学部卒業生のネームプレートを学部玄関前に設置できたことに対し、嬉しく思っていること。またこの機に同級会を開いたりして写真を撮ったりしている学年もあり、同窓として親睦をはかる機会もあったとの挨拶があった。また歯学部の独立行政法人化についてわかる範囲で教えてもらいたい。総合診療部、第一口腔外科の新任教授について教えてもらいたいとの質問に対し…

河野病院長より、歯学部、病院とも4月に2つの改組を行い順調に推移しているとのこと。

独立行政法人というのは、民営化とは違い、仮に経済面で赤字なら経営難になって倒産するというのではないが、存在価値を見い出せなければ切り捨てられるということは考えられるとのこと。国立大学歯学部の統合、再編については経営面での改善などは、第三者に評価されていくのではないかとのこと。

総合診療部教授には興地先生(東京医歯卒)、第一口腔外科教授には斉藤先生(東歯卒)が就任したとのこと。返答をいただいた。

需給問題に関して、同窓会側から「将来的には歯科医師の定年制が導入されなければ、この問題は解決しないのではないか?」という問いに対しては、「我々歯科医はカリエスと歯周病だけを扱ってきた感があるが、これからはその他の疾患も扱って行くことが必要であり、実際医科の方ではそうして新しい疾病を治療していく方向で進んできた」との返答を頂いた。

また教授会側から卒後研修の受入れ先として、従たる施設として同窓会員の中で受入れてくれる会員がいるか、どの程度協力してもらえるか?調べて欲しいとの依頼に、アンケートをとってみるとの同窓会側から返答があった。

同窓会室が手狭になった為ロッカーを他の場所に移したいとの要望には、山田教授から「何とかする。」と快諾を頂いた。

最後にこれから歯学部—同窓会の関係として何をしてくれ、どうして欲しいという事でなく何々をしたい、これこれをどうしたいということを考えてお互いにパートナーとしてやっていきたいということで、会を終了した。

2001年度第2回歯学部教授会・同窓会定期協議会開催

渉外理事 斉 藤 功 (14期)

日 時：2002年2月27日(水)

午後7:00から9:00

場 所：新潟大学歯学部学部長室

出席者：(教授会) 河野病院長、山田副学部長

(同窓会) 神田会長、野村(教授)副会長、多和田副会長、赤坂副会長、深町専務理事、鈴木渉外理事、藤巻渉外理事、斉藤渉外理事

2001年度第2回教授会と同窓会との定期協議会が上記の日程で行われた。

まず神田会長から、平成15年秋、新潟大学の主



催で全国歯科大学同窓・校友会懇話会（全歯懇）ならびに新設国立大学歯学部同窓会協議会（国歯協）が開催予定であること、および平成14年度同窓会学術講演会では附属病院総合診療部の興地教授に講演をお願いする旨の報告がなされた。

続いて、以下の点について意見交換が行われた。

●歯学部（大学院医歯学総合研究科）に関連して（山田副学部長）

1. 共用試験について

共用試験は、歯学部学生の臨床能力向上を意図して臨床実習前の歯学部学生に対して行われる全国共通（28大学で施行予定）の試験である。この試験は、CBT（Computer Based Test）とOSCE（Objective Structured Clinical Examination）からなり、CBTではコンピューターにより各自の基礎的臨床能力が、OSCEでは客観的臨床能力がそれぞれ試される。

CBTにおいて出題される問題の範囲は、すでに作成されている「歯学部教育モデル・コア・カリキュラム」のなかで指定されている、4年終了時までには学ぶべき項目の中にある。したがって、各大学においては4年終了時までには、指定されている項目については必須なものとして教育する必要がある。さらに、モデルコアカリキュラムの中で5、6年次に教育する項目は選択でよいことになっている。共用試験の目的は、社会に対して、国民に対して、全国共通のカリキュラムで教育することによって一定のレベルに到達していること、さらには一定のレベルに到達したあとで臨床実習が行われることによって、学生の質を担保しようとするものである。共用試験における合格ラインは各大学に任されている。最低80%という意見が出ているとはいえ、公開を原則としている現社会においては、こうした合格ラインも各大学で公開を求められるかもしれないし、また社会通念からは優秀な歯科医師として合格ライン100%を求められるかもしれない。厚生労働省による歯科医師国家試験も存続する。

実際の施行は平成14年度入学生が4年次になる平成17年度からであるが、それに先だって新潟大学でも今年3月中にトライアルが行われる予定とのことであった。

2. 世界的教育・研究拠点形成のための重点的支援への対応について

すでに新聞紙上でも報じられているように、文部科学省は、世界的な教育研究拠点形成を重点的に支援し、国際競争力のある世界最高水準の大学づくりを推進するために、「世界的教育・研究拠点形成のための重点的支援—21世紀COEプログラム—」を企画した。この企画では、学問分野を10分野程度に分け、専攻系を一単位として大学ごとに申請が受け付けられる予定で、選考は専門家、有識者などによる客観的で公正な第三者評価に基づき選定される。当口腔生命科学専攻でも現在申請への準備を進めているが、学長のリーダーシップの下で各大学の戦略に基づき申請することになっているため、実際に提出されるかどうかは大学内での検討、調整が行われた後であるとの説明があった。

●歯学部附属病院に関連して（河野病院長）

1. 歯科臨床研修医の研修期間（複合方式の従たる施設）について

平成18年度から、診療に従事する歯科医師は、免許を受けた後1年以上一定の研修体制を有する大学附属病院または臨床研修施設において臨床研修を行わなければならない。研修方式には、医育機関附属病院などのみで行う単独研修方式と主たる施設（附属病院など）と従たる施設とが連携して研修を行う複合研修方式とがある。すでに、前回の同窓会発送物の中に、従たる施設の指定基準の概要を同封した結果、3件ほどの問い合わせが来た。

新潟大学歯学部附属病院では、平成18年度からの必修化に向けて、従たる施設を設けていきたいと考えている。国から臨床研修医への給与負担援助がどの程度行われるかなど、まだ不確定な部分





もあるが、逐次情報をお伝えしますので興味のある先生方は附属病院院長宛にお問い合わせくださいとのことであった。

2. 医学部附属病院と歯学部附属病院の統合について

各分野における構造改革が叫ばれる中、歯学部附属病院の存在意義を示し、効率的な病院運営や建造物・施設の有効活用といった点から、歯学部、医学部の附属病院の統合という考え方が浮上ってきている。歯学部附属病院では、すでに病院将来計画委員会を中心として、国民から与えられた資源を有効に活用し、国や地域からのさらなる期待に応えるべく検討を始めていたが、特に、現在進行中の医学部附属病院病棟の第Ⅱ期工事にあたって、早急に医病・歯病の統合に関する具体案を呈示する必要性が出てきた。

その詳細については、具体案がでた時点で歯学部ニュースに報告するが、施設の有効活用、地域への良質な医療の提供、すぐれた歯科医師を輩出するための臨床教育の充実ならびに高度で先進的な医療技術の開発・提供といった観点から統合を進めていくとの説明があった。

●その他

1. 医療情報部室ならびに病診連携について

昨年末、附属病院に医療情報部が立ち上がり、渉外理事でもある口腔外科の鈴木一郎先生が中心となって運営していくことになった。業務内容の詳細については検討中であるが、電子カルテ化、クライアントである患者さんへのサービス向上、医療情報の提供さらには病診連携システムの構築、遠隔地医療への参画など広範囲にわたって活動していく予定であるとの説明があった。

また、同窓会側から、困難な症例に対する問い合わせや生涯学習に関連した文献検索の支援などの体制づくりもお願いしたいとの要望が出された。

2. 歯科医師受給問題に関連して

赤坂副会長より、過日、大学に勤務する先生あるいは開業歯科医院に勤務する先生向けに、新潟県および新潟市における受給問題を含めた歯科医療の状況についてオープンセミナー形式で講演会を開催した旨の報告があった。参加者は10数名であったとのこと、今後もこのような形で情報を提供していきたいとのことであった。

平成13年度同窓会セミナー 『21世紀の診療室を見つめて ～予防とメンテナンスを 考えるテーブルセミナー～』 を受講して

23期 大橋直子

最近、歯科医療に於いても重要となってきた予防に注目したセミナーが行われると知って、今回初めて同窓会セミナーに参加させていただきました。

第1回：唾液検査(サリバテスト)PMTCの導入とその進め方

オーラルケアの長沼孝代先生から午前はサリバテストについて、午後はPMTCについて、基礎的な知識、理論と実際の方法について講義をしていただき、その後実習を行うという内容でした。午前の講義では細菌学で習った懐かしい細菌達を思い出し、サリバテストではどきどきしながら培地に唾液をつけ、唾液緩衝能に一喜一憂といったところでした(写真 第一回)。講習後、自分の培地を培養してみました。確かに細菌がコロニーという目に見える物になるだけに、患者への口腔内状態の説明がより説得力のある物になると思いました。PMTCについては、その効果と臨床的応用についての講義と、ラバーカップとプラスチックチップ使用時のエンジンの回転速度など、実際行う上でのポイントの説明を受けた後、相互実習を行いました。術者としての注意点の確認、患者側の体験(プラスチックチップの感覚、PMTC後





の画面のつるつる感など)と、約1時間半の実習はあっというまでした。講義だけではなく、実際に経験してみることで、歯科医院へのサリバテストとPMTCの導入が可能であることを実感する事が出来ました。

第2回：リコールとメンテナンスを考える

宇都宮にて開業されている村上修一先生から、カリエス、歯周病、咬合の予防管理システムについて、先生の医院で実践されていることを中心に講義をしていただきました。いかに患者さんに理解していただくか、視覚に訴えるサリバテスト等の活用法やチャートの作成など、サリバテストを実際に歯科医院に導入しようとしている者として、とても参考になる講義でした。午後からは白水貿易の方から、ルートプレーニングが可能な超音波スケーラー“スプラソン P-MAX”、スケーラーの電動シャープナー“ペリオスター3000”、サリバテストについて実際に器具を使いながら教えて

いただきました(写真 第二回)。特にスプラソン P-MAXについては、今後の歯周治療にソフトパワー超音波スケーラーの活躍の場が増えていくだろうと実感させられるものでした。

この2回のセミナーに参加して、歯科医療の知識、機械、材料が日進月歩で進歩している事を痛感しました。このような時代に合ったテーマを企画、主催して下さった同窓会の学術委員の先生方ありがとうございました。当日も、担当の先生方のご尽力で、私たち受講生は知識の吸収に専念することが出来ました。

最後になりますが、卒業したての若い先生方も、もっともこの同窓会のセミナーを活用してみませんか。リーズナブル(安すぎる?)な受講料で最先端の技術、話題を勉強でき、且つ久しぶりに新潟を訪ねる機会にもなり、一石二鳥、いや三鳥とは思いませんか。来年度のセミナーがますます盛会となりますよう期待しています。



第一回



第二回

